

【実践報告】

子どもの「あそび」から「創造性」を引き出す保育

——実習生を迎える大谷幼稚園からの発信——

藤田 浩子*・清水 晶子*・川口 昌子*
岡 佐智子**

キーワード：自然 創造性 好奇心 「待ち」の保育 素直な心 学び

1、はじめに

大谷幼稚園は昭和44年10月に富田林市寺池台の地に左藤行子園長のもと開設し、今年で49年目を迎える。園長左藤行子は自身お寺に生まれお寺に嫁ぎ大谷学園で理事長、学長を歴任し学園の発展に貢献してきたが、幼稚園開設にあたり「校租の念を受け継ぎ、幼き日にみ仏の前で自ら合掌するような敬虔なところを培い、明るく、のびのびと育てることを理想として幼稚園を設立しました。」と述べているように後半の人生を幼児教育にかけることを喜びとした。

「み仏の前で合掌するところ」とは仏さまの光をいただいて今日も輝いている、どの子にも光は等しくあてられていることに感謝するところをいう。平成26年園長を引き受けた時にこの気持ちを「ありがとうのところが育つ幼稚園」と表現し教育・保育への願いを子どもたちに伝えることを基本姿勢としてきた。

行子園長作詞の幼稚園の歌詞には三番とも「ほとけのこども」と入っている。こうした本園の教育方針は「宗教的情操教育」「社会性を養う教育」「創造の芽を伸ばす教育」の3つにまとめられている。

「社会性を養う教育」では生活体験を通して「共に生き共に育つ」教育を重視している。

「創造の芽を伸ばす教育」

園生活に慣れてきた年少児は好奇心にあふれ、園庭中を駆け巡り、草木の下や重たい石を持ち上げてダンゴムシに歓声する。「何食べてんの」「このひげみたいなん何やのー」と先生たちに問いかけてくる。何事にも興味津津で年中・年長児の後をついていき、「どうして?」「これなあに」「ふーん、でもどうしてえ」と質問を連発する。幼児の生活は遊びであり学びである

*大谷幼稚園

**大谷幼稚園園長

といわれる通りで日々新しい発見は担任たちに刺激を与えている。4歳を過ぎる頃からやがて自分で考え始め、自分で行動しようとするやる気を起こす創造の時期に入っていく。時には子どもたちの質問に科学的に答えられなく戸惑う場合もあるが、子どもの成長にとっても大事な時期と捉えて子どもたちとしっかり向かい合うことで教師の本当の力量が試される。日々成長していく子どもと関わる心地よさが教員としての成長の糧になる。

平成30年4月1日から新しい幼稚園教育要領が施行され、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の具体的なイメージとして「健康な心と体」・「自立心」・「協働性」・「道徳性・規範意識の芽生え」・「社会生活との関わり」・「思考力の芽生え」・「自然との関わり・生命尊重」・「数量や図形、標識や文字等への関心・感覚」・「言葉による伝え合い」・「豊かな感性と表現」の10項目にまとめられた。偏りなくさまざまな経験をすること、そして幼児一人ひとりの特性に応じた発達の課題に即した保育実践により、10項目に挙げたような力を伸ばしていこうという方針を示したものである。幼児教育の質の高さとは、資質・能力を育てるカリキュラム・プロセスの高さを意味する。カリキュラムとは、全体的な指導計画で、プロセスとは「環境を通しての保育」「主体的生活・自発的遊び」「保育者の援助」などがある。「このプロセスを通してどのような力をつけさせたいのか」を明確にし、具体的な活動計画（カリキュラム）をたてていくことになる。国の定めた教育要領を参考にしながら、本園は学園の教育理念を教育の柱として日々取り組んでいる。

本実践報告では本園の教育の柱の中から創造の芽を伸ばす教育を取り上げ「あそび」から「創造性」を引き出す保育をねらいにした保育実践と併せて2018年に実習に来園した大阪大谷大学の学生の姿も紹介する。

2、実践方法

自然の中で遊ぶことで、子どもたちは好奇心や探究心を広げ、創造の芽を伸ばしていく。この創造の芽を伸ばす遊びとは、保育者の指示で行う活動ではなく、子ども自らがしたいことを進めていく自発的な遊びである。この自発的な遊びからねばり強さや挑戦してみようという心が育っていく。

本実践事例1では遊びと自然と創造性に注目し、①子どもたちの自然体験、② ①の体験からドングリを題材にした遊びを作りだす保育案に基づく保育室での保育模様、③ ①②の保育後に再び自然体験を行い子どもの創造性への意欲を探ることにした。

子どもたちがしてみたいくなるような設定をすることで、おのずとやる気を引き出し更に刺激を与えることができる。楽しい活動であれば自発的にその遊びをし、その結果しっかりと遊び込むことになる。自然のものでも、ただ見ているだけでは身近なものにはなり得ず、実際に対

象に触れて科学的発見をした時にはじめて身近なものになっていく。保育者は、子どもたちが様々なことに気付けるような工夫が必要となる。

また、学生の事例2は来園した学生の園児への関わり方を観察し、学生の態度・表現から考察を加えることとした

3、実践内容

大谷幼稚園において、平成30年度に行った「創造性の芽を伸ばす保育実践」の事例と、「実習生と子どもの関わり」の事例を紹介する。

事例1「秋の自然で遊ぶ」

①公園での園児の感動体験

幼稚園の近くを散歩していたときのこと。道路にはたくさんの落ち葉が広がっていた。そんな秋の風景を楽しみながら歩いていたとき、S児が落ち葉の上を歩きながら「カシャ、カシャ・・・」と言いはじめた。落ち葉を踏むと、音になることに面白さを感じたS児は「カシャ、カシャ」と言いながら歩いている。「葉っぱって音がするのね。」とそっと声をかけてみると、嬉しそうに「ずーっと、カシャカシャ鳴ってるんよ。」と答えた。それを聞いたS児の近くを歩いていた子どもたちも、「ほんまや!」「カシャカシャいうてる!」と声をあげ、同じように落ち葉を踏みながら歩き始めた。そして、カシャカシャと口々に言いながら、公園に到着。公園では、各自持ったビニール袋にドングリを集める子や、バッタを追いかけることに夢中になる子どもたちの姿があった。その中で保育者はS児に「公園の中にも、葉っぱが落ちてるんだね。」と声を掛けると、あちらこちらの葉っぱを踏んで、「ここの葉っぱ、音ならへん。」「あ!ここの葉っぱ、ピッって鳴る!」など、乾いた落ち葉や、湿った落ち葉・それぞれで音がなったりならなかったり、違った音であったりすることに興味を持ち、何度も試そうとする姿が見られた。

公園内のドングリを集めていたR児は、拾おうとしたドングリが汚れていることが気になり、そのドングリを指で弾いた。ポーンと飛んだドングリを見て、「めっちゃ飛んだ」とつぶやき、また違うドングリを指で弾いてみた。より遠くまで飛んだドングリを見て、ニコッと笑いながら次のドングリへと指を伸ばした。その様子を見ていたK児もドングリ飛ばしに参戦。「うわ!Kくんのドングリの方が遠くまで行った。」「もう一回!」と思いを伝え、ドングリの飛ばし合いを始めた時、帰園の時間になってしまった。「もっとやりたかったな・・・」とても残念そうな表情の二人であった。

子どもたちは、好奇心をもって“秋の自然物”にかかわる中で、落ち葉の音やドングリを飛

子どもの「あそび」から「創造性」を引き出す保育

ばすことに興味をもち、気づいたり、試したり、保育者や友だちに思いを伝えたりすることを楽しんだ。

②保育者の願い

このような感動体験を土台にして、③のドングリで遊ぼうという保育につなげることにした。ドングリを転がしたり、飛ばしたりする面白さに心を動かし、遊びがうまくできる素材や方法を、3歳児なりに試そうとすることを期待している。また、一人ひとりが遊びこむ中で、友だちや保育者とのやり取りを楽しみ、見つけたことや感じたことを伝えようとする姿が増えていくことを願う。

また、落ち葉の音探しの体験の展開は④再び公園へという経験につなげ、自然に対する好奇心、探究心をより深めていけることを願っている。

③-(1) 保育案

保育案			
日時	平成30年10月16日(火)(10:00~11:30) 保育者 藤田浩子		
対象児	3歳児ふじ組17名(男児7名女児10名)		
ねらい	・自然のものを使って工夫したり、繰り返したりして遊ぶ ・友だちや保育者に自分の思いを伝える楽しさを味わう		
主題	ドングリで遊ぼう		
準備物	ドングリ・段ボール・牛乳パック・卵パック・空き箱・大型積み木 ビニールテープ・ペットボトル・エアパッキン・ガムテープ・セロテープ		
時間	幼児の活動	保育者の留意点	5領域のねらいと内容
10:00	○振り返り ・公園での発見や思いを伝える	・公園での体験を自分なりの言葉で伝えられるよう援助する。 ・廃材などは、必要と感じた時に子ども自らが試せるよう、手の届く所に設置する。	健康：ねらい(1) 内容(4) 人間関係： ねらい(1)(2) 内容(4)(5)(6)(8)
10:10	◎ドングリを使って遊ぶ ・指で弾く ・転がす ・坂道を作る ・素材を使ってみる ・音遊びをする	・子どもたちが考えていることや思っていることを自ら試せるような問いかけをする。 ・それぞれの思いや考えをしっかりと受け止められるようにする。 ・してみたいと思ったことを十分に試せる時間と場所を保障する。 ・子どもの気付きや思いを大切に、どのような遊びをしようとしているのかを読み取る。 ・子どもの遊びを紹介し、友だちと繋げたり、面白さを共感できるようにしたりする。	環境：ねらい(2)(3) 内容(2)(4)(8)(9) 言葉：ねらい(1)(2) 内容(1)(2)(4)(8)
11:00	○話し合いをする	・保育者も一緒に遊び、楽しさを共感できるようにする。 ・葛藤する場面では、子どもの思いをよく聞き、一緒に考えたり試したり、どのような行動をとるのか見守ったりする。	表現：ねらい(2) 内容(1)(3)(5)
11:15	○片付ける	・自分の思いを伝える喜びを味わえるよう援助する。	

子どもの「あそび」から「創造性」を引き出す保育

活動に対する5領域のねらいと内容

健康	ねらい	(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
	内容	(4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
人間関係	ねらい	(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。 (2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。
	内容	(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。 (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。 (6) 思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。 (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりなどする。
環境	ねらい	(2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。 (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。
	内容	(2) 生活の中で、様々なものに触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。 (4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。 (8) 身近な物や遊具に興味を持って関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。 (9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
言葉	ねらい	(1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。 (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
	内容	(1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり、話したりする。 (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。 (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。 (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
表現	ねらい	(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
	内容	(1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。 (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。

③-(2) 子どもの姿

活動前の話し合いでは、「ドングリいっぱい集めたよ!」「バッタを捕まえたよ!」など、3歳児なりに経験を言葉で伝える姿がみられた。その中で、S児は場所によって落ち葉を踏んだ音が違ったことを、R児とK児はドングリ飛ばしが面白くてもっとやりかったという思いを話した。3歳児なりに秋の自然物に触れ、楽しかった思いを伝えあう子ど



もたちの姿が見られた。

活動が始まると早速 K 児が先生となり、ドングリの弾き方を教え始める。「僕もやってみたい！」と真似ようとするが、なかなか K 児のように出来ない子もいる。そこで、何かの手立てになればと板状にした段ボールを出してみると、A 児が空き箱を持ってきた。空き箱を段ボールの板の土台にして、ドングリが転がるコースを作ろうとしている様子。数人の子どもたちも「面白そう！」と空き箱をもって集まり、板の両端に空き箱を置いた。両端の箱は高低差がなく、ドングリは思うようには転がらず、「手で転がしたらいいねん！」「こっちを手でもっといて・・・」など伝え合っている。その時、ひとりの子の足が土台の箱に触れて箱がずれて、偶発的に傾斜ができた。「うわ、壊れたやん！」と言う子もいたが、その傾斜をドングリが転がりだした。「転がった！」子どもたちは、目をキラキラさせて、手に持っているドングリを次々と転がし始めた。しかしみんなが一斉に転がすので、土台の箱が崩れたり、板がずれたり問題が続発。崩れる土台を積みなおす度に、角度の違う坂道ができあがった。保育者があえてガムテープを提供しなかったことで、友だちと一緒にコースを作っては転がし、崩れてはまた新たなコースを作りなおし、3 歳児なりに試行錯誤する姿がみられた。その後はコースの下で転がってきたドングリをキャッチして、たまったドングリを一斉に転がし出した。ダイナミックに転がるドングリに大騒ぎして、保育室に散らばったドングリを夢中で拾い集めることを楽しみ、何度も繰り返した〈写真 1〉。



〈写真 1〉

また、「落ち葉の音の違いの発見」の発言を聞いたことから「音」に興味をもっていた R 児は、自分の目の高さ辺りからドングリをひとつ床に落とし、「先生、ドングリはね、コン！って鳴るんやで。」と話した。繰り返すうちにドングリを 2 つ落として「2 つにしたら、コンコンやって・・・」そして「いっぱいにしたらバラバラバラってなってる！」と、遊んでいる中で気づいたことを笑顔で伝える姿が見られた。しかし、落ちたドングリは、他の友だちも集めながら遊んでいるので、すぐになくなり、なかなか思うように「音試し」のためにドングリを使えない。

そんな時、コースの下にセットされた箱にドングリが入った時に「コロン」という音がすることに気付いた様子である。そこで、R 児は牛乳パックを持って来て、その中に集めたドングリを入れ時々、振りながら音を確認しているようであった。自分の納得できる音になったのか

「先生、ここ閉めときたいねん。」と牛乳パックの口を押さえてやってきた。「どうやって閉めたいの？」と聞くと「テープで止めたい。」と言うのでガムテープを渡した。“自分だけのドングリとお気に入りの音”を手に入れた R 児は何度もその牛乳パックを振って遊んでいた。しばらくすると廃材の中からラップの芯を探してきて、その牛乳パックに貼りつけだした。そして「これ、飛行機。飛ん



〈写真 2〉

でるときに、音鳴るんやで！」と得意げな様子。すると、それに刺激を受けた周りの子どもたちから「R くんみたいなん、作りたい。」という声聞こえはじめ、牛乳パックや卵パックにドングリを入れて振って遊ぶ姿が見られた 〈写真 2〉。

“落ち葉の音さがし”の発言から音に興味をもった R 児の探究心は、自然物と廃材を使い、みたり工夫したりして、楽器作りにつながった。そのことに気が付いた周りの子ども達も、見て、触れて、やってみて、みんなで楽器遊びを楽しんだ。

④再び公園へ

数日後、再び行くことを伝えると、大喜びの子どもたち。風のせい、前回よりも道路に落ちている葉っぱが少ない。S 児が「落ち葉、ちょっとになった。」とつぶやくと、周りの子どもたちが「いっぱいの方が葉っぱ踏んで遊んだんちゃう？」「誰か持って帰ったんかなあ」「お掃除するおばちゃん来たんやで。」「ちょっとやけど、カシャカシャって鳴ってるなあ。」とそれぞれの思いを口々に



〈写真 3〉

話していた 〈写真 3〉。公園にはたくさんの落ち葉が残っていて、“落ち葉の音さがし”を楽しんだ S 児は、前回「ピッって鳴る！」と発見した場所に向かって駆け出し、落ち葉を踏んでいる。不思議そうな表情をした S 児に「どうしたの？」と聞いてみると「前と音が違う。」「今日はね、グサグサって鳴ってる。前はここの葉っぱ、ピッっていうたのに。」と答えた。前回の雨上がりの落ち葉と今回の乾いた落ち葉の音の違いに気付いたようである。前回と同じ音を探すように、少しずつ移動しながら落ち葉を踏んでいた S 児であるが、「今日はグサグサの日やわ・・・」と納得した表情であった。



〈写真 4〉



〈写真 5〉

同じ場所で落ち葉を踏んだのに音が違うという自然物の不思議体験をした S 児である〈写真 4〉。

保育者の一人が集めた葉っぱを空に向かってポーンと投げると、空から葉っぱが舞い降りた。子どもたちは歓声をあげながら自分たちも落ち葉を集めて放り投げる遊びをし始めた。集めた葉っぱを放り投げて、ふわっと落ちてくる様子を楽しんでいる。そのとき、できるだけたくさんの葉っぱを集めて放り投げよう



〈写真 6〉

と、M 児が葉っぱをギュッと団子状にして放り投げた。その“葉っぱお団子”は、お友だちの肩にトンと当たって草むらに落ちていった。今までとちがう動きをみせた葉っぱに新たな興味を持った M 児。何度も“葉っぱお団子”を作って放り投げて遊んでいたが、乾燥した落ち葉を握ったとき、落ち葉は粉々に崩れてしまった。M 児は粉々になった落ち葉を大発見したような得意顔でフーッと吹き飛ばし、再び落ち葉を握った。落ち葉によって、粉々になったり、お団子状になったりすることを何度も繰り返して遊んでいる。自然の不思議さと感覚遊び楽しんだ M 児であった〈写真 5・6〉。

事例 1 の考察

落ちていく場所によって落ち葉の音が違うという感動体験をした S 児は、その後も音に興味をもち、いろいろな音探しをするという行動につながっていった。最初の散歩時に S 児が発した「カシャカシャ」というつぶやきを受け、保育者が「葉っぱって音がするのね。」と共感する言葉を掛けたことをきっかけに、子ども同士で葉っぱの音を伝え合うという経験をし、更に公園内の落ち葉にも気付くように働きかけたことで、どの場所でどんな音が聞こえるのかという S 児の探究心を深めていけたのではないと思われる。また、S 児のつぶやきを聞き

たことで、遊びの中で音に興味をもつ子が出てきた。ドングリを床に落したときの音の発見から、個数を増やした時の音、牛乳パックに入れた時の音と、それぞれの音の違いを楽しむという遊びに発展し、“自分もしてみたい”と、見て真似ようとする3歳児ならではの子どもたちの姿も見られた。

R児の「ドングリが弾き飛ぶ」という偶然の体験から、R児の遊びを真似する子どもたちの姿が現れ、ドングリ遊びはどんどん広がっていった。うまく弾ける子もいれば、思うようにできずに葛藤している様子もあった。段ボールを用意することで、コースを作って転がすという遊びに発展し、子ども同士が思いを伝え合っている姿も見られた。土台となる箱をガムテープで固定しなかったことで様々な角度の傾斜が偶発的に発生したことと、何度も崩れては組み立てなおすという繰り返しがあったことで、子どもたちは創造力を使って遊び込むことができた。3歳児ならではの個々の遊びを保障することで、各々が興味をもったドングリ遊びを深められ、予定していた時間よりも長く遊び込み、それぞれが興味をもった活動に取り組む姿がみられた。興味の対象は一人ひとり違っても、一人ひとりが遊び込むことでその子なりの興味の世界が広がり、発見や気づき自体が自分の中から湧いてくる面白さを味わったと思われる。

落ち葉の音の違いに気付いたS児も、ドングリを弾くと思いのほか遠くまで飛ばせたR児も、最初に沸いた感情は、驚きであろう。驚きとは、自分が思っていたこととは違うという知的な働きである。意外であることに人は驚く。創造性を伸ばすための驚きは与えられるものではなく、“すごいなあ”“不思議だなあ”と自分で見つけた驚きでなければならない。子どもは、“不思議だなあ”と思うことで興味を持ち、“おもしろいなあ”と思いながら自分の興味にあう体験を繰り返すことで自信を持てるようになり、更なる発見につながっていく。このような体験を重ねることで創造性を伸ばしていけると考えている。子どもの反応はとても素直で、おもしろくないと思えば遊びが停滞したり目的をもてなくなったりするが、おもしろいと思えば驚くほど長時間、集中して繰り返して取り組む。遊びの中で“今、これをこうしたい！”という思いが湧き上がってきたとき、それを試せる環境を設定したり、自らが選べる場所に材料となるものを用意しておいたりすることで、子どもたちの創造力を支えることになる。様々な場面で、子どもたちが試行錯誤し、適切なものを選ぶという経験は大切だと考える。保育者は、子どもの様子を見逃すことなく、援助者として子どもの発見の共感者となったり、見守ったり、的確な働きかけをしていく必要がある。3歳児は、友だちや保育者の姿を見て、真似しようとする。真似をするといっても簡単に出来るものではないので、その子どもなりの工夫や保育者の的確な働きかけが必要となってくるのである。

今後も子どものつぶやきを大事にし、そこから好奇心や探究心を揺さぶる環境を設定し、子どもたちが試行錯誤できる場を保障することで達成感や満足感を味わい、創造性を伸ばしていけるよう援助していきたい。

事例2 「見学実習に来た学生の姿と子どもたち」

大谷幼稚園は明るく、のびのびと育てることを理想として開設された。

子どもたちが生活する環境は、子どもの心身の発達や成長に深くかかわる。環境には大きく分けて、子どもたちが過ごす保育室や園庭、おもちゃや道具などを指す「物的環境」と、子どもたちが会える保育者・保護者・友だち・来園者など、子どもたちが関わる全ての人物を示す「人的環境」がある。教育実習やインターンシップなどの学生は、保育での大事な人的環境である。本園の教育方針の一つである「子どもの創造性を伸ばす」教育・保育に、実習生に来た学生たちが子どもたちにどのようなのびのび感を与え創造性を伸ばす教育に関わっていたのかを今年度の実習学生の活動を中心に考察する。本園では実習生をお兄さん先生、お姉さん先生と呼んでいるのでそのように表現することとした。

事例2-(1)

夏休み間際のとても暑い日。園庭にプールを用意し水あそびをしていた。プールの近くには、3歳児の目線には少し高めの位置に紐で吊り下げられたフラフープが用意されていた。子どもたちはプールの中に入ったり、水鉄砲で遊んだりしている。水鉄砲を持ち、どこに飛ばすでもなく水鉄砲から水が飛び出す遊びを楽しんでいたS児の側に一人のお姉さん先生がいた。そのうちに、ふいにS児が水鉄砲を上に向けて発射した。するとその水が吊るされたフラフープの方に飛んでいったのである。その瞬間、お姉さん先生は「入ったねー。すごい！」と声を掛けた。S児は、お姉さん先生の言葉から“フープを的にして水鉄砲を飛ばす”という新たな目的をもって遊び始めた。

お姉さん先生の言葉掛けが子どもに目的意識を持たせた事例である。最初からフープに意識を向けさせ、的にするという遊びを提供していたら、S児自身が「目的を見つけて遊ぶ」という経験にはつながり得なかったであろう。まずは、目的を持って遊べるまで待ったのである。水が飛び出す様子を存分に楽しんだ後であったからこそ、その後の遊びへと発展していったのである。そして、「入ったねー。すごい！」とタイミングよく言葉を掛けたことが、S児の心に響き、水鉄砲での水遊びが、的に向けて飛ばして遊ぶという目的をもった遊びへと変わったのである。お姉さん先生の言葉掛けがきっかけになり、目的意識に刺激を与えることができたといえる〈写真7〉。



〈写真7〉

事例 2-(2)

ふじ柵で心地よい日陰となる砂場で、男児数人とお兄さん先生が遊んでいた。子どもたちはスコップでせっせと砂を積み上げている。お兄さん先生もスコップを片手に参戦しようとしている様子。その時、T 児がお兄さん先生に語りだした。

T「今からな、お山つくるねん。」

先「お山つくるんや」

T「うん。めっちゃ高いのんにするねん。」

先「めっちゃ高くするんや。」

T「うん。ほんなら、登れるからなあ。」

と T 児は得意な様子を見せた。お兄さん先生が T 児の発する言葉をしっかりと受けとめ、丁寧に返したことで、T 児は自分の思いを最後まで伝えることができた。その後、山登りできる砂山を目指して夢中になってスコップで砂を積み上げていく T 児の姿が見られた。

子どもの言葉を繰り返すことで、子どもが自分の遊びのめあてを明確にしていっていった例である。「お山つくるねん。」「めっちゃ高いのんにするねん。」という発言に対して、砂山を高くする方法を教えたりしていたら、T 児の“登って遊べる”という思いまで引き出せなかったかもしれない。自分の思いを言葉にし、受け止めてもらったことで、意欲的に遊ぶ姿が見られたのである。子どもは目的を見つけて、それに向かって夢中になれるとき、大きな満足感を得る。お兄さん先生の丁寧な受け止めと言葉の繰り返しは、T 児の遊びをより深いものにできたといえる。

事例 2-(3)

園庭の桜が葉を落とし、子どもたちが落ち葉遊びを楽しみはじめた。この日の3歳児は、落ち葉アートを楽しんでいた。H 児は画用紙に2枚ほどの落ち葉を貼り、その落ち葉の横にサインペンで「タネ、タネ・・・」と言いながら点を3つ描いた。H 児の側にいたお姉さん先生は、それを見て優しく微笑みながら「タネをいっぱい描いてるんだねえ。」と一言。すると、H 児は満面の笑みでうなずき、そこから更にたくさんのタネを描きだした。お姉さん先生が、自分の思いを受け止めてくれたことで、更に表現することに喜びを感じられたようである。

セロテープを使って画用紙に落ち葉を貼った W 児。続いてどんぐりもセロテープで貼ろうとした所に、お姉さん先生がやってきて「どんぐりは貼りにくいから、こうやって貼るんだよ。」と伝えた。W 児はお姉さん先生の言う通りに貼り付けると、画用紙を縦に持ってもどんぐりが外れることがないくらい、しっかりと貼り付けることができた。保育者は、その近くで同じようにどんぐりを貼り付けようとした始めた D 児に「どうやってセロテープを貼ったら、どんぐりはくっつくんだろうねえ。」と声を掛け、共に考えた。D 児は「う～ん、こうかな

あ・・・。あかんあ・・・。こうしたらいけるかなあ・・・。」と考えながら貼り方を工夫し始めた。その様子をみたお姉さん先生はその後、貼り方を伝えるのではなく、工夫する方法を一緒に考えだした〈写真8〉。

保育の中では、遊びに適した用具や材料を、子どもたちの遊びの様子や発達段階を見ながら提示していくことが必要である。用具を使用させる場合、適切なものを提供して「このように使うのよ。」と教えることが必要なときもある。しかし、子ども自身に試行錯誤させて、用具やその使い方を考えさせることも重要なので、「どうしたらうまくできるかなあ。」と、意欲を失わないで再び遊び込む中で自然と発見できるように促していきたい。試行錯誤するという経験を重ねることが創造性を伸ばす力となるのである。失敗を経験させることが、創造性を伸ばすポイントになる。



〈写真8〉

事例 2-(4)

外遊びの後、なかなか保育室に戻ろうとしない H 児。担任も友だちもみんな保育室に戻り、園庭の片隅には、H 児とお兄さん先生の 2 人になっていた。まだまだ遊び足りない H 児に対して、お兄さん先生はいろいろな声を掛けてみたり、入室を促すような行動をしたり、少し距離をとって見守ったりして、諦めることなく H 児に向き合っている。H 児は最後にもう一度、園庭の草むらにバッタがいるかどうかを見たかったようだ。最後まで H 児の思いに寄り添ったお兄さん先生は、H 児と共に草むらを確認して保育室へ戻っていった。

子ども一人ひとりの特性に応じた発達の課題を見つけるためには、まずは子ども一人ひとりをよく見ることが大切である。お兄さん先生が H 児の気持ちを理解しようと試行錯誤する姿は保育の原点だと思われる。



事例 2-(5)

人見知りが激しく、初めて出会う人とは目があうだけでドキドキした表情になる Y 児。そんな Y 児と会話をしようと、一人のお兄さん先生が奮闘していた。最初は砂場でいきなり側にしゃがみ込み、Y 児を驚かせてしまった。その後、一旦は Y 児の側を離れたが遊びの中で

Y児が援助を必要としそうな時を狙って再びY児の側に戻ってくる。しかし、この時もまたY児は下を向いて黙り込んでしまう。それからは、他の子どもと遊びながら時々Y児に声を掛けるという姿がみられた。この日は短時間実習だったので、Y児からの返事は得られないまま、お別れの時間となってしまった。帰り際にお兄さん先生は、クラスの子どもたち全員に「またね!」と言いながらハイタッチをしてみわった。もちろんY児にもハイタッチを求めたが、Y児はお兄さん先生の顔をチラッと見るとすぐに下を向いた。あと一歩!なのである。その後、このお兄さん先生は「今度はしゃべれるように頑張ろう。課題見つけた感じやな。」と言って大学に戻っていった。

一回の見学実習で課題を見つけることができたお兄さん先生の姿から、小さな課題を見過ごさないう保育者の視点について考えさせられた。“これくらい大丈夫だろう”という気持ちでいると子どもたちの伸ばせる力、保育者のスキルアップをはかるチャンスを逃してしまうかもしれない。日々の保育の中で課題を見つけることは、「今」を全力で生きている子どもたちの「今」を大切にすることにつながるのである。



事例 2-(6)

3歳児クラスが2クラス一緒に“どろんこ遊び”をしていたときのこと。8名ほどのお兄さん先生、お姉さん先生も子どもたちと同様に裸足になり、砂場でどろんこになっている。いつも以上に満員の砂場は空間的には狭いのであるが、何だか楽しそうである。子どもたちは、スコップやバケツを使って「お水いっぱい入れたらプールみたいになったで。」「こっちも大きく掘ってるんやで。」と穴の大きさ比べをしたり、「ベチョベチョでお団子にならへん。」「いややなあ。」と、砂と水の量について思いを語り合ったりする姿が見られた。そんな中、M児が一人のお姉さん先生を連れて園庭のおもちゃ倉庫に行き、手押し車を持って砂場に戻って来ようとした。その姿を見て保育者の一人が、安全への配慮から「今日はダメよ。戻しておいで。」と声を掛けた。いつも手押し車を砂場に持って行って遊んでいるM児はしょんぼり。その様子に、一緒にいたお姉さん先生は即座に「私が確認を取らなくて、子どもに触らせてしまいました。すみません。」と謝罪した。お姉さん先生の素直な心に感動すると同時に、子どもへの言葉掛けを反省した瞬間であった。

“いつも”は使えるおもちゃが“いま”は何故使えないのか、子どもが気付いて納得できる言葉を掛ける必要があった。靴を履いた状態で遊んでいて、砂場に空間的な余裕のある“いつ

も」と、全員裸足で遊んでいる状態で、砂場は満員の“いま”の違いに気付かせると同時に、手押し車がなぜ必要だったのか、他のもので代用できたりしないかなど、子どもの思いを伝える力や考える力を伸ばすチャンスだったのである。お姉さん先生の素直な言動をきっかけに、M児と一緒に“いつもと今”の違いについて考え、安全に遊ぶことについての気付きを得られるように指導し、M児の思いを聞き取ることができた。

事例 2-(7)

子どもが「お姉さん先生、あそぼ！」と声を掛けると「うん。ありがとう。」と返事しているお姉さん先生がいた。「このスコップ、貸してあげる」と言われると、再び「わあ、ありがとう。」と答える。保育者が一緒に雑巾を洗っても「ありがとうございます。」と言いながら雑巾を洗う。彼女は一日に何回「ありがとう」を言ったのだろうか。どんなことにでも「感謝」の心で接しているお姉さん先生の姿はとてもキラキラしていた。お姉さん先生に「ありがとう。」と言われた子どもたちもまた嬉しそうな笑顔でお姉さん先生を見て、遊びの中での会話も弾んでいるのである。

子どもたちに「ありがとうと言いましょ。」と言葉で教えるより、子どもたちに「ありがとう」という言葉をどんどん掛けていくことで、子どもたちの心に「ありがとう」の心が育つ。「朝はおはようございますとご挨拶をしましょ。」と教えるより、にっこりと笑顔で「おはようございます。」と挨拶をしていくことで、朝の挨拶の心地よさを知っていく。子どもの回りにいる大人の発している言葉や態度が、子どもの言葉の獲得や道徳性の確立に影響してくるのである（写真9）。



〈写真9〉

考察

子どもたちは毎日保育者や友だち、学生などの来園者との関わりから、たくさんのことを学んでいる。また、保育者も毎日の子どもの姿から、どのような時にどんな力を伸ばしていけるのかを考えたり反省したりしている。学生は、子どもから見れば、保育者同様に、“先生”なのである。そんな学生の言葉掛けで、その後の子どもに成長が見られた事例として、2-(1)(2)(3)をあげた。言葉掛けが子どもに目的意識を持たせたり、自分の遊びのめあてを明確にできたりしていた。子どもと向き合おうとする学生の思いが子どもたちに伝わっているように感じられる。

学生の素直な心と向上心が、子どもに安心感を与えた事例として2-(4) (5) (6) (7) をあげた。全ての事例に出てくる学生の姿から、素直さが見えてくる。素直さは、人としてもとりわけ保育者としてとても大切な心である。子どもの考える力や豊かな心、好奇心・探究心を育くもうとするときに問われることは、保育者の人間性であろう。予期せぬ何かが起こった時に、その人の人間性が出るものである。子どもは正直であるから、人の気持ちをまっすぐに受け止めるので、保育者の指導だけでなく、保育者の言動からも社会的な価値観を学んでいる。保育者の人間性が大きな教育力であることを意識していきたい。先生として来園している学生も保育者の一人なのである。それぞれの学生の姿から子どもたちが学んだことは大きいだろう。子どもは自ら考え、失敗を繰り返しながら何かを作り上げた時、大きな満足感を得る。これは、大人にもいえることである。最初から成功する方法を知るより、「どうしたらいいのか」と考え、試行錯誤を重ねて達成できた時のほうが、より達成感を得られる。これが創造性を育む一歩となる。学生には、失敗を恐れずに積極的に子どもたちと関わり、子どもの成長する姿をみることで、自分自身も成長していったと願っている。

4、おわりに

子どもが興味をもって自発的に遊び始める時、保育者が見守ってくれているという安心感は、幼児期の子どもにとって絶対的な心の栄養になる。子どもが興味を持って自由に遊ぶ様子を保育者が穏やかな表情で眺めていると、子どもには、自分がしていることを肯定的に見られているという安心感がうまれる。人的環境としての保育者の役割の大部分は、“子どものよりどころ”となることではないだろうか。子ども一人ひとりにそれぞれの世界がある。大人と同じものを見たり触ったりしていても、子どもの見ているところや感じているところ、興味を向けている視線や視点は異なっている。子どもたちの独自の見方や感じ方を読み取り、受け入れることから保育が始まっていくのである。そこから、子どもたちの思いを引き出し、創造性を伸ばせるように援助していくのである。大人は安易に口出しをしないことである。

危険でない限り、子どもが自由に思いを表現してあそべるような物的環境、そして十分に考えたり試したりする時間と空間もそっと準備しておきたい。子どもは興味をもったことを“もっと知りたい・もっとしてみたい”と、行動していくと課題にぶつかることがよくある。これが子ども自身の問題解決の良い試練となる。子どもの疑問に対してすぐに答えを出さず、一緒に考えたり不思議に思ったり、共感したりすることが大切である。子どもは、様々なことに興味関心を持ち、やってみないと心を動かし、どうしたらいいのかを迷い、試行錯誤を繰り返す中で、友だちや保育者の思いにも触れて、大きな喜びを感じ自信につながる。そして、探究心から次の意欲につながり、いっそうやる気が出て創造力が育つのである。筑波大学の松原達哉

氏は「幼児期の創造性は探究心や好奇心のかたまりみたいなものです。三歳からは、こうした欲求を常に刺激するような条件づくりが、創造性を養い伸ばすのに効果的です。」と述べている。今後も、どのような経験が子どもの創造性を伸ばす力になるのか、好奇心や探究心を揺さぶる環境構成とはどのようなものであるか、そのために保育者はどのような援助をしていくことが必要であるかを考えていきたい。また、実習で来園する学生さんたちとも、保育に関しての共有を深めていきたいと思う。

保育の世界には、「この行動にはこの対応」というマニュアルは当てにならない。「 $1+1=2$ 」の方程式になるとは限らない。こうしたからこう育つというものはない。また、こうしなければならない、こうでなければならないというものもない。子ども一人ひとり違うものであるからこそ、個々の子どもをよく見て、熟慮した対応からその子どもにふさわしい答えが導きだされる。すべての個性は天からの贈り物という意識を持ち続けねばならない。「幼児一人ひとりの特性に応じた発達の課題に即した指導をする」ことの大前提として、「子どもが見えているか」と問い続ける保育実践を行っていこうと思う。

大谷学園の教育である「報恩感謝」には同朋思想がある。「朋」という字は「共に肩を並べて歩いて行こう。あなたと私の間に、指導する側、指導される側という上下の関係はない」という意味をもっている。

とりわけ今年は実習生の園児への対応を見ていて、この「朋」という文字の意味の大きさと深さを感じた。学生たちからありがとうのこころを育ててもらったようである。

謝辞

今回の活動にご協力いただきました日野梨絵先生、東田真季先生に厚く御礼申し上げます。

参考・引用文献

- 1) 岡佐智子、2111、施設紹介大谷幼稚園 大阪大谷大学教育福祉学部幼児教育実践センター紀要 (1) P 57-61
- 2) 無藤隆、2011、『保育の学校・5つの今日的課題』フレーベル館
- 3) 無藤隆、2011、『保育の学校・5領域』フレーベル館
- 4) 長瀬美子、2015、『幼児期の発達と生活・あそび』ひとなる書房
- 5) 松原達哉、1996、『子どもを伸ばす「なぜ」の聞き方・答え方』PHP 研究所
- 6) 吾田富士子、2018、『これからの保育と教育－未来を見すえた人間形成－』八千代出版
- 7) 永野重史、進野智子、2005、『幼児が夢中になるとき・・・』北大路書房
- 8) 大場幸男企画、2012『保育者論』萌文書林